

大正期における倫理・宗教思想の展開 (6)

—— 大正期における西田哲学の形成 ——

峰 島 旭 雄

1

今回は、副題に示すとおり、明治末期から著書『善の研究』によって日本近代哲学思想史に大きなエポックをつくった西田幾多郎の哲学の、とくに大正期における自己形成を探ってみるのであるが、そのまえに、最近、大正文化にたいする新しい評価があらわれているので、そのことにまず触れてみたい。

新しい評価とは、大正期を高く位置づけようとするものである。最近創刊号を出した「大正および大正人」⁽¹⁾は、「主張しよう、そして我らの時代を掘り起こそう」というスローガンを掲げ、岡本太郎、池田弥三郎、巖谷大四、風間完による座談会「佳き哉大正時代、良き哉大正人」を掲載している。このように大正期をあらためて見直そうという動きがなぜ起ったかについて、「大正および大正人」の「編集後記」は次のごとく述べている。

いろいろな見方があるにせよ、現在の日本の繁栄はやはり神武以来のものであることは確実といえましょう。世界各国、わけても先進国がドイツを除いて過去の永き遺産だけでようやく食いつないでいるという、まさに世界史的興味の時代にこの日本は太平の夢をタラフク食っているということは、やはり日本人の持っている才能によるものと思います。

ところで、あの敗戦の混乱から見事に立ち直った力の源泉は、もちろん日本人全体であるとして、尖兵となって第一線で闘ったのはだれかということになりますと、どうしても大正世代人ということになってしまいます。

しからはその大正っ子たちがどうして、明治の頑固親父たちからは軽佻浮薄とのしられ、昭和の無責任世代からは能なし野郎と蔑視されなければならないのか。どう考えても不思議なことと言わざるを得ません。

昭和人に大正史を見直そうなんて言ってごらん下さい。不思議そうな顔で「大正時代って大震災以外に何があったの？」と言われるのがオチです。

そうなのです。大正時代については国の方針でそうなったのではないかと思わせるくらいに見事にネグレクトされていたのです。昭和っ子が大正について考える必要など全くなかったわけです。しかし歴史の進展は大正をネグレクトしたままでおくはずがありません。

私たちが非才を省みずに、この雑誌を発刊したのも、オーバーに言えば、歴史の進展がそうさせたのであり、私たちの情熱を支えてくれているのは不当なる差別待遇への怒りであります……。

この「編集後記」からうかがい知られるのは、一つは、大正期が本質的に見て決して〈谷間〉の時代、〈過渡期〉ではないという主張であり、もう一つは、「歴史の進展」が大正期の再発掘をうながしたという認識である。このことは、いわば、大正期を、時間（歴史）と永遠との二つの相において捉えようとすることを意味する。このような捉え方は、本来、大正期なるものをどのように評価しようとするかというアプローチの問題へ還元されるのであって、小論が最初に問題としたところでもあった。¹²⁾ いまこの論議をくりかえさないが、一つだけ追加すれば、最近において大正期のこのような再評価が、ある意味では突如として主張されてきたことは、いま述べた永遠の相における本質的な評価を底に秘めつつ、しかし、やはり「歴史の進展」、つまり時間（歴史）の相における再評価という面が強いのではあるまいか。なぜなら、第二次世界大戦後でもすでに30年余を経て、戦後の営みに一つのピリオドが打たれるべき時期になり、そこで活躍した人々をふりかえてみたとき、大正人がクローズ・アップされてきたという事情があることは確かであるからである。いわば時の流れのパースペクティブが、スペクトルのように、移りいくにつれて、いまや50—70

年の過去となった大正期が、ちょうど明治百年までのときとおなじように、いまやパースペクティブの焦点となったのである。「明治は遠くなりけり」ということが現実化したともいえるのであり、昭和っ子にとって、明治、つまりは祖父の時代が終って、大正、つまりは父の時代になったのである。大正期が大きくクローズ・アップされてきたことは、なんといっても、このような現代とのかかわり、相関的な係数である面が強いといえることができる。予測的にいえば、このような大正期評価は、それがふたたび祖父の時代となるまで続くことであろう——昭和期があまりにも長く、昭和期が父の時代となるときは、大正期の祖父の時代とオーバーラップするというあらたな局面があろうけれども。

さて、「大正および大正人」の「巻頭言」で、南博——かれもまた大正人であることはいうまでもない——は次のように述べている。

日本近代史の研究は二つの方向から始まっている。一つは明治維新からであり、一つは満州事変後のファシズム体制からである。この場合、見事に大正時代が脱け落ちている。大正期は単なる過渡期としてしか見られていなかったと言える。しかし、よく考えてみよう。現在のわれわれの周りを取り巻く現象はほとんど大正期にその原型が存在していたのである。デモクラシー、マルクス主義、そして私小説、風俗小説、プロレタリア芸術、前衛派などの芸術面、マスコミ、マスカルチャーの現代との酷似、生活、風俗の面でも生活の合理化、家庭文化、消費文化などは大小の差こそあれ、そのパターンは大正期にすでに見られたのであった。時代的な性格から見ても第二次大戦後の混乱と激動のなかに諸改革を終え、朝鮮戦争を契機とする経済の成長、多党化による政治の変動を迎えている現在が、明治を終えて政治経済にわたって新しい方向に進もうとした大正期と類似していると言えよう。

このように今日の状況の原型を大正期に見ようとする志向は、近代史のなかで、むしろ大正期を相対的に健康な状態であると考え、明治期をその混乱発展の段階、昭和期をその歪曲・膨脹の段階と規定する見方を成立させる。大正に生まれた人たちが、この時代を平和でのんびりしたよき時代だと回想する感覚のなかにこのような見方が

ひそんでいるはずである……。

さきに引用した「編集後記」が時間（歴史）の相を強調して、戦後日本の担い手としての大正人を見直そうとしたのにたいして、この南博の「巻頭言」は、むしろ永遠の相において、すなわち、明治・大正・昭和の流れの中で大正を軸として思想史に光をあてようとする構えであり、現代文化の原型がそこで铸造されたことを強調しているのである。もう一つ、この発言の中で注目すべきことは、戦後の現在が大正期と類似しているという点である。この点については、これまで、明治百年を軸として、むしろ明治初期啓蒙思想の展開と戦後思想の展開とが類似するという解釈もあった。もし戦後の現在が大正期と類似するとすれば、戦後直後の思想展開と明治初期啓蒙思想の展開、戦後現在にいたる思想展開と大正期の思想展開というパラレルになるであろう。ここにもまた、さきほど述べたようなスペクトルの移りゆきをやや縮小した重なりあいが見られるとあってよからう。

このようなパースペクティブにのせて大正期を見る仕方は、思想史の構成にあたっては必要なことと思われる。「一九一四年夏から一八年秋にかけての戦争〔第一次世界大戦、筆者注〕が、はるかに遠い将来、人類の歴史のなかでどのように位置づけられるのか、その場にいあわせてみたい気持ちに、わたくしは時折おそわれる。いまでこそ〈大戦間時代〉などと力説される時期が、一つの点としてかすんでしまうような時代になっても——それまで人類が生きのこれればのはなしだが——、第一次世界大戦は、だれの眼にもあざやかな歴史の折れ目として実在感をましてゆくだろう、との予測をもつからである。」⁹⁾ このように述べる思想史家もいるのである。おそらく、このようなパースペクティブのおさえ方いかんによって、同じ大正期があざやかに浮き出して見えたり、はるかに霞んで見えたりすることであろう。そのような種々のアプローチについては、すでに指摘したとおり、小論の最初にかなり詳しく扱ってある。ここでは、そのようなパースペクティブのおさえ方によって一人の思想家、それも明治・大

正・昭和を生き、活動した思想家がどのように捉えられることになるかを、問題としてみたい。

2

明治・大正・昭和を生き、活動した思想家としては、小論では、すでに桑木厳翼を取り上げて論じたことがあった。ここでは西田幾多郎を取り上げることにしたい。西田の場合、思想史的観点からして、大正期をクローズ・アップすることと、どのようなかかわりあいになるであろうか。一つには、この問題は、思想史全体と一個の思想家の裡なる思想史という絡みあいでもある。この点についての方法論的な論議は、小論のシリーズに先立つ「明治期における西洋哲学の受容と展開」という一連の論考の冒頭でも取り上げたのであるが、⁽⁴⁾ それは個と全体、個人と社会という問題域でもある。さらにそれは、大正期に限定していえば、大正文化主義の思潮と大正期における西田哲学の形成という問題にもなってくる。いくぶんずつかレベルを異にするこれらの問題点については、独断的に結論を出すことは困難である。かえて、一つの事例研究を通じて、ひとこまずつ確かめ、やがて、これらの問題点をどのように処理すべきかの展望への手がかりを得ることに努めるほかはないように思われる。大正期における西田哲学の形成は、まさしくこのような視座を据えて取り組まれなければならないだろう。

船山信一は大正期における西田哲学を〈自覚の哲学〉として論じているが、まづもって「日本の近代哲学史における西田哲学の地位」について論述している。⁽⁵⁾ 船山は「大正期の西田哲学、とくに『自覚に於ける直観と反省』の正しい理解、したがってまた西田哲学の全発展におけるその正しい地位を理解する」ために、西田哲学の発展段階についての分類を試みているが、⁽⁶⁾ それにもかかわらず、『善の研究』から『自覚に於ける直観と反省』へ、そして『働くものから見るものへ』への展開をたどりながらも、それが大正文化主義とどの

ようなかかわりあいにあるのかについては、触れていない。

はたして西田哲学は大正文化主義とかかわりあいなく自己展開したのであろうか。かの難解な哲学的思索は、一見、大正文化主義のやや〈気持の軽やかな〉哲学思想と無縁であるようにもみえる。しかしながら、西田哲学が時代思潮と全く無縁に形成されたということは、ありえないといわなければならない。哲学の本性上、時代思潮よりの影響を受けながら、それを隠微な底辺においてあたたため、外装ではほとんど痕跡を認めえないということが、起りうるのである。大正期における西田哲学の形成はまさしくそのようなものであったといえよう。いま、そのことにかんする二つの証言を挙げてみたい。

一つは、西田哲学の大正期における最大の収穫である『自覚に於ける直観と反省』において、西田は悪戦苦闘を経て、文化の創造の根源を探求したという見解である。⁷⁾ すなわち、西田は、大正期のそのころ、さまざまな仕方で論議をかもし出していた文化主義ないし人格主義の、あれやこれやの問題を、ジャーナリスティックに取り上げることなどは全くしないで、そもそもそのような文化創造の根源は何か、人格を形成するそのものは何かを、かれ自身の哲学的思索の歩みとともに、問題としたのである。それは表層への application ではなく、根源への reduction であった。

もう一つの証言は、昭和期に入って漸く表層に出た西田の日本文化論を大正期のこの頃に引き据えて見ようとする見解である。⁸⁾ 西田自身、『働くものから見るものへ』（昭和2年10月）の「序」で次のように述べている。

形相を有となし形成を善となす泰西文化の絢爛たる発展には、尚ぶべきもの、学ぶべきものの許多なるは云ふまでもないが、幾千年来我等の祖先を孚み来つた東洋文化の根柢には、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くと云つた様なものが潜んで居るのではなからうか。我々の心は此の如きものを求めて已まない、私がかかる要求に哲学的根柢を与へて見たいと思ふのである。

大正期を終えて、そこからして造出されたこの『働くものから見るものへ』

が、根本的には文化——なかんづく東洋文化——の哲学的基礎づけという課題を秘めていることが、この言葉から分かるのである。そしてさらに、日本文化というように限定して、「我々は益々特有の文化を發展し、益々日本的となると共に、此文化をして世界文化の一要素として欠くべからざるものとしたい。」⁹⁾という考えを、すでに大正期のはじめに、すなわち、西田哲学の思想展開として『善の研究』から『自覚に於ける直観と反省』へといわれるその『自覚に於ける直観と反省』の書とはほぼ同じ時期に、表明しているのである。「西田が『自覚に於ける直観と反省』を書き上げた頃から時代は急速に動きはじめた。彼はその動きを敏感に感じながらも、ひたすらな思索をつうじて〈絶対自由意志〉の立場を内からのりこえる努力をつづけ」¹⁰⁾という評定は、まさにこのことをいいあてているということができよう。

これらの証言によって示されるように、西田は大正期の文化の問題に決して無関心、無縁ではなかった。ただ、それを、その成立根拠にまで掘り下げて思索していったのである。その掘り下げが深ければ深いほど、それが文化の問題、日本文化の問題、あるいは東洋文化と世界文化というような問題として、表層において論じられるまでには、時間がかかった。『哲学の根本問題 続篇（弁証法的世界）』（岩波全書、昭和9年）に載った「形而上学的立場から見た東西古代の文化形態」は昭和9年9月に『文学』（第2巻第9号）に発表されたものであり、『哲学論文集第三』（昭和14年）とほぼ同じころ行われた講演「日本文化の問題」（岩波新書として刊行、昭和13年）は、じつに、大正期の前述の時期から20—25年の歳月を経ているのである。西田が、また別な意味での時流にそって急に、文化とか日本文化の問題を、そのときどきに取り上げたのではないのである。

では、大正期における西田哲学が、いま述べたようなきわめて隠微な仕方で、大正文化主義とかかわりを保ちながらもへだたりをとりつつ、どのように自己形成をしていったかを、以下において少したどってみよう。

3

まず、大正期における西田哲学の形成の秘密にいくらかでもアプローチするために、周知のごとき、西田哲学へのヨーロッパ哲学の影響・取り入れのありさまを、日記や書簡にあらわれたデータによって、探ってみよう。

明治45年——その7月30日で大正元年となる——の日記の中には、次のような記録が見出される。

- 1月20日 Windelband の Vom System der Kategorien をよむ。(岩波書店刊『西田幾多郎全集』昭和40年版, 第17巻284頁——以下17-284のように略す)
- 3月6日 Rodin の L'art をよむ。(17-287)
- 3月12日 夜宗教学会に於て宗教的意識といふ講演をなす。(17-287)
- 3月24日 午前リッケルトをよむ。(17-288)
- 4月6日 丸善へ Rickert の Kulturw. u. Naturw. 注文。(17-289)
- 4月11日 けふ Bergson の La perception du changement をよんだ。(17-290)
- 4月13日 午後図書館にゆき Rodin の彫刻を見る。(17-290)
- 4月28日 Poincaré の Mechanik をよむ。(17-291)
- 8月16日 夜「歴史と自然科学」とにつきて講話。(17-297)
- 9月1日 Poincaré の Savants et Écrivants をよむ。(17-299)
- 9月11日 午後学校に行き Cohen 及 Bergson の Laughter をかり来る。(17-299)
- 10月1日 Poincaré の La Logique de l'infini をよむ。(17-301)
- 11月28日 近衛にウィンデルバントをかす。(17-305)
- 12月1日 ロゴスをよむ。(17-305)
- 12月12日 丸善注文。Bergson, Nelson, Russell. (17-305)
- 12月15日 Fichte 注文。(17-306)

以下、大正2年以降のそのようなデータを挙げると、次のごとくである。

大正2年

- 2月26日 Toulouse の Poincaré をよむ。(17-311)
- 4月21日 夜錦田「ベルグソンの哲学」をもちて来る。(17-314)

- 10月16日 夜 Husserl の *Phänomenologie* をよむ。(17-324)
- 大正6年
- 1月28日 午後丸善に行き, *Brothers Karamazov* を買ふ。(17-344)
- 2月17日 桑木或雄へ *Cassirer* を送る。(17-345)
- 大正8年
- 1月27日 演習ベルグソンに定む。(17-362)
- 2月25日 Kroner, *Über log. u. aesth. Allgemeingültigkeit; Paulsen, Das Problem d. Empfindung.* (17-364)
- 4月18日 夜長楽館にて Dewey の宴会あり。(17-365)
- 大正9年
- (巻初めの頁) Maine de Biran. *Mémoires sur les perceptions obscures*, Armand (et) Colin; Spinoza, *Ethics* Félix Alcan. (17-371)
- 1月4日 夜田辺君 Husserl を持ち来る。(17-371)
- 1月12日 *Jeans* の *Electricity* をよみはじめむ。(17-372)
- 4月24日 夜 *Orchestra* をきく。Beethoven の *V Symphonie* をきく。(17-374)
- 6月(月初の頁) *Platon* 50, *Kant* 30, *Royce* 10, *Rickert* 2, *Dante*, *Windelband* 10 (17-375)
- 7月(月初の頁) *G. E. Moore*, *Ethics*; *Laue*; *Cunningham*; *E. Rhode*; *Tarde*; *Vico*, by *Croce*. (17-376~7)
- (巻末雑録欄) *Riemann*, *Hypothese* *Gauss*, *Absolute Differentials* (17-377)
- 大正10年
- 1月4日 *ガイゼル*より *Husserl* 送り来る。山内より *リーマン*等送り来る。(17-378)
- 2月2日 丸善より *Sidgwick* の倫理学史もち来る。(17-380)^叫
- 大正11年
- 1月30日 山内へ手紙出す。Bauer, *Christl. Gnosis/Kahl*, *Primat des Willens/Redepennig*, *Origenes* 注文。(17-386)
- 5月4日 山内へ藤代の代頼により *シラー* 文庫注文。併して *フッサール* 年報一, 二, 写真機, 木場に托することを依頼。(17-391)

大正12年

- 1月11日 山内へはペーメのことにつき、三木へも同様の件につき、はがき。田中へ Schiller Humanism 等注文。(17-397)
- 6月23日 9冊製本, Schelling 4, Pfeiderer, Cournot, Salmon, Werner, Venerose [Veronese?] (17-401)
- 8月10日 Husserl に手紙と本を送る。(17-401)

大正13年

- 1月3日 三木に Kant(Cassirer)VI, Phänomenologie (Heidegger, Aristoteles), 天野に Rohmer, d. Schöpfungsproblem. Stumpf, Tonpsychologie; Ursprung d. Raumvorstellung 注文。小林にミルの論理学を頼んだ。森(外)氏来る。三木よりラスクの全集1巻送り来る。(17-404)
- 1月6日 教育会にゆき信州の小学校教員のためフィヒテの話をなす。(17-404)
- 1月19日 三木へ Kant (Cassirer) VI 注文。(17-405)
- 2月4日 天野にラッソン訳アリストテレスの形而上学注文。(17-406)
- 2月8日 三木へ Trendelenburg, Beiträge 注文。(17-407)
- 2月9日 Liebisch-Grabmann, Gesch. d. schol. Meth. 注文。(17-407)
- 2月12日 天野へ Trendelenburg, Bäumker (Materie), Weisse を頼む。(17-407)
- 2月16日 三木へ Aristoteles (Lasson); Überweg IV; Kant, Anthropologie 注文。(17-407)
- 3月31日 午後山内君来る。ペーメ, ボチチェリの神曲挿画を持ち来る。(17-410)
- 6月23日 ロッチェは学生側にて123頁の61の終までよむ。(17-411)
- 9月22日 Rickert へ手紙を出した。(17-412)

大正14年

- 5月6日 丸善へロッスのアリストテレス注文。(17-419)

大正期の範囲で日記から拾い出せるデータは上出のようなものであるが、日記とダブって、書簡においても、同様なデータを抽出することができる。

大正元年

- 9月2日 (堀維孝宛)

……ベルグソンの Creative Evolution 御会読の由先日岡部君よりも承り候 ベルグ

ソンは大分解し難きものに候 それにあの英訳はちと不評判のものに候 Stewart の書は小生未だ見ず 近頃は英語界にてもベルグソンに関するもの非常に出る由なり 先日 Lindsay といふ人のベルグソンに就てかいたものを一寸一読いたし候 これは可なりよきものの様に候 併し小生はベルグソンの如きは其人の書をよまねばだめと存じ候 (18-159~160)

大正2年

1月18日 (堀維孝宛)

……Eucken Bergson 等御読の由……右の書など御読の事は御目的の方も大に助けることと存じ候 Eucken はどうも思想がちと粗笨と思ひ候がいかん とても Bergson の如き天才には無くと存じ候 (18-163) ㊦

大正5年

1月11日 (桑木或雄宛)

……仰の如く Planck の Neue Bahnen の終りの方は余程 Pragmatism の様にも相見之候 (18-184) ㊦

大正7年

3月25日 (植田寿蔵宛)

……乍御手数 „Dilthey, Erlebnis und Dichtung “ 一寸見度候間小使に頼み御送り被下間敷や (18-198)

大正9年

2月15日 (山本良吉宛)

……通常の Euclid 幾何学と異なった非ユークリッド幾何のことは専門の方の書としては非常に多くの書あり、併し Poincaré のならば氏の有名な Science and Hypothesis の Second part にあり……併し非ユークリッド幾何のことはポアンカレーの創見にはあらず 百年程のロシヤの Lobatchefsky のものと独の Riemann のものと二種あり…… (18-220)

大正10年

10月15日 (桑木或雄宛)

……Electricity & Magnetism の Text book にて英訳の中の如何なる書が最もよろしく候か Jeans の書といふのは余程よろしきものに候か それからいつか御訳し

に相成り候 Lagrange の力学といふのは全集から離れて別冊のもの有之候か 又
先日の御書 Larmor の出版せし Maxwell の Matter & Motion の書名はやはり
マ氏の Matter & Motion, edited by Larmor とか申し候か (18-236~37)

大正11年

2月6日 (T. Yamanouchi 宛)

-
1. F. Klein, Ausgewählte Kapitel der Zahlentheorie 1, 2. (Teubner)
 2. König, Einleitung in die allgemeine Theorie der algebraischen Grössen.
(Teubner)

の二書御送り被下間敷や……

1. Gangaub, Metaphysische Psychologie d. heilig. Augustinus, 1852, Au-
gusburg.
1. Engelhardt, Die angeblichen Schriften des Areopagiten Dionysius, Sulz-
bach, 1823.

御探し被下間敷や…… (18-242)

7月15日 (木場了本宛)

……ヘーゲルの宗教哲学を送つて下さつた相でそれは誠に難有存じます……ペーメは
もはやよろしゆ御座います…… (18-247)

8月23・4日 (山内得立宛)

……

1. Croce, Aesthetik. übersetzt von Federn, 1905.

1. Pidoll, Aus der Werkstatt eines Künstlers.—

これは Marées のことをかいたものだが一寸ないかも知れぬ

1. Vincent van Gogh, Briefe, 2 Bde. (Verlag v. Cassirer; Berlin)
1. Gauguin, Noa-Noa.

又右の書物を買つて置いて下さいませぬか (18-254)

11月28日 (山内得立宛)

……フッサール先生いかなる講義をなさるるか Naema Noesis など分らぬ六ヶ敷講
義をなさるるにや 分析のみこまかく語のみ堂々として鬼面以世人を駭かすの類たら

ずんば幸なり　メーリスの歴史哲学も comprehensive ではあるがあまり頭のよい人でもない様なり Heidegger は Duns Scotus の事をかいたものがあつた様だがよんでは見ず 併し小生はかねて Duns Scotus から何かまだまだ出るだらうと思ふて居るので一寸注意した事がある Geyger や Heidel の Jaspers などの書いたものはいかなるものか 評判はいかん 小生は未だ読んで見ぬが面白いものか Ebbinghaus といふのは心理学の E の息子にてもなきか リッケルトの System もまだよまず あの人の様にしてしまへば System は面白きものにもあらざるべし……

……グンドルフの Goethe といふ書藤代君よりもらふ事に致し候 geistreich な文学や芸術の論を見度と存じ候……Kroner, Über log. u. aesth. Allgemeingültigkeit, 1908 といふ書手に入り申さず候や願上候…… (18-258~59)⁶⁴

12月17日 (山内得立宛)

……カント会へ入会の事あり難たう……Insel から出たドストエフスキーの独訳 Brüder Karamazov, Idiot, Teufel などどうか願ひます……Gogh の手紙の大本 2 冊の如き余程高くなる様なら御見合せ下さい 小さい一冊本を持つてゐますから シラーの全集は Cotta 版の古本でもよいからあつたら御求め下さい 古本でも Zuschlag がかかるのですか プラトンの Phaidon はハイデルに居る三木君にも頼んだからどうでもよろしい…… (18-260)

大正12年

1月29日 (山内得立宛)

……先日頼んで上げた Armand Colin 出版の Maine de Biran, Mémoires sur les perceptions obscures はまだ出ないか 出たら送つてくれたまへ 私は Biran がすきになつた 思想が共鳴する所があつて面白いが「日記」にあらはれた人物にも共鳴する (18-264)⁶⁵

大正14年

2月15日 (木場了本宛)

1. Augustin, Freiheit des menschlichen Willens und göttliche Gnade, übersetzt von Widmer, 1824.
1. Schriften Jakob Böhme, ausgewählt u. herausgegeben von H. Kayser. (Insel-Verlag) (18-283)

6月23日（務台理作宛）

Grabmann の Thomas Aquinas 御序の節一寸拝見できませぬか……（18-287）

10月11日（J. Ueda 宛）

……先便に御願したアリストートルの論理学の仏訳のこと三木と小林太市郎とに頼んであるのですが買ってくれたかどうか

その外

Secrétan, Philosophie de la liberté, 2 vol. 1872. Chouchoud, Spinoza (Felix Alcan) の二書も兩人に頼んであるのですが……（18-290）

12月1日（J. Ueda 宛）

……かねて御願してゐた Saint-Hilaire 訳の La Logique d'Aristote. 4 vols. がけふ来た……（18-291）

大正15年

6月8日（R. Mutai 宛）

……

Aristoteles, Vier Bücher über die Himmelsgebäude und zwei Bücher über Entstehen und Vergehen, griechisch und deutsch von C. Prantl, Leipzig, 1857. といふ書を探して下さいませぬか……（18-304）

7月4日（R. Mutai 宛）

……Lasson の訳した Aristoteles, Über die Seele がたしか Eugen Diederichs から出て居ると思ひますからあつたら御送り下さいませぬか Mansbach の Augustin を御心がけを願ひます Teubner 出版のアリストテレス De Anima の原文も一緒に御願いたします（18-305）

9月20日（R. Mutai 宛）

……もう御兩人共にフライブルクへ御出でせう フッサール教授によるしく……（18-314）

以上のデータから分かるように、西田は、大正期において、自己の思想形成のためにいくつかの特徴ある書物の購入をしている。まず第一に、古典的あるいは基礎的と考えられる哲学を読もうとしていることが挙げられる。プラトン、

アリストテレス、アウグスティヌス、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルなど、とくにアリストテレスの原文や独訳や研究書まで入手しようとしていることに注目したい。近代から現代へかけては、直接に西田に影響を及ぼした哲学を含めて、メヌ・ド・ピラン、オイケン、ディルタイ、ヴィンデルバント、リッケルト、ラスク、コーヘン、カッシャー、ベルグソン、フッサール、デューイ等の名が見出される。フッサールとは、務台理作や高橋里美を通して連絡があり、「フッサール教授によろしく」というような言葉もあるが、批判もしている。

第二に、『善の研究』が西田哲学の体系的出発点であったと同時に、たしかにそれは倫理学の書でもあることから知られるように、西田は倫理学の基本的な文献を読もうとしているのである。西田哲学の体系的発展の歩みのうちには、とりたてて倫理学と銘打った形での論述は見出されないが、このような——たとえばスピノザ、シジウィック、G・E・ムアのごとき——倫理学関係の文献を読んだことが、西田哲学の体系的発展のもとをなしていることは、明らかである。

第三に、西田哲学が思索の強靱な論理でつらぬかれているその基礎として、論理学——アリストテレスの論理学を含めて——の書に関心を示していることを、指摘したい。

第四に、ポアンカレ、プランク、マックスウェルなどの科学思想をよく読み、とくに桑木或雄にしばしば手紙で質問を出し、数学基礎論関係のものにまで目を通してることが知られる。これらが西田哲学のうちに組み込まれていることは、いうまでもない。

第五に、美学、芸術論および芸術鑑賞への傾斜である。実際に展覧会を見に行ったり、音楽会を聴きに行くなど、その方面への関心が強いことがうかがい知られる。

第六に、ひろく文学への関心が挙げられる。ダンテ、トルストイ、ドストエ

フスキー等。やはり思想の面からのアプローチではあるが。

第七に、心理学関係、とくに当時の心理学の傾向（たとえばシュトゥンプ）をいちやく取り入れようとしている。大正期の西田哲学の形成に心理学的要素——とくに意識の問題の取り扱いなどにおいて——が強いことを、思いあわすべきであろう。

第八に、宗教学・宗教哲学関係である。すでに挙げたアウグスティヌス、それからグループマンなどを介してのトマス・アクィナス、ドゥンス・スコトゥス、ベーメなど。そして西田が宗教学講座を担当していたこと、周知のごとき禅体験をもっていること、⁴⁹ 大谷大学へ出講し、「愚禿親鸞」（明治44年）を書いていることから分かるように、宗教なるものが『善の研究』以来西田のモチーフであったことは、この大正期を通じても変わらないのである。

これらの特徴を数え上げることができるが、さらに、もう少し立ち入って、西田哲学形成の秘密に触れてみよう。

4

西田の日記には、摘出したような書物のことのほかに、講義のこと、執筆のことなども簡単に記されているが、思索の内容について、たとえばガブリエル・マルセルの『形而上学日記』のように、述べられている箇所は、あまりない。

大正2年

1月13日 ……先日より「思惟と直観」といふ文考へて思想纏らず大に煩悶し居たが、夜一つ有力なる思想を得て、従来の疑問に一解決を与へたるが如し。(17-309)

1月15日 けふはまた分らなくなりました。…… (17-309)

このように、西田の悪戦苦闘の思索のあとが記されているのであるが、その後しばらくはそのような記述はない。大正7、8年になると、いくつかそのような記述が見出される。

大正7年

- 10月30日 Parmenides に於ける dialectic discussion of One は Inhaltlosigkeit から起る。Inhaltlosigkeit といふことは Act selbst が Gegenstand となるといふことである。math. Gegenstand はすべて此性質を有す。group とか Körper とかいふのも之によつて説明できるではなからうか。(17-359)
- 10月31日 Analysis にも Richtung がなければならぬ。その Richtung は synthetisches Ganze の voraussetzen より来る Anschauung が基とならねばならぬ。(17-359)
- 11月5日 Group の Einheit といふのは Nichts の働きである。Zero が Einheit となり得る。(17-359)
- 11月7日 Geschichte に於ては das Ganze (statisch) が与へられねばならぬ。現実 は vom Ganzen bestimmt と見られる時 Gedanke となる。(17-359)
- 11月11日 10月30日の考につづいて——combination of elements が system それ自身に属する時、即ち group を作る時、それは complete in itself の system であつて、之を a priori といふ。Act と Gegenstand との一の System に属するのみである。(17-359)⁴⁷⁾
- 11月16日 方便が其實なりといふ。Reality is purpose. [上欄] In the treatment of spiritual phaenomena the abstract is concrete. Kants categorical imperative is concrete, nay a power. Because our mind is free. (17-359~60)⁴⁸⁾
- 12月17日 Wundt denkt Phantasie als Wahrnehmung + Assoziation + Gefühl etc. Aber Phantasie selbst ist lebendige Tätigkeit. Sie hat ihr eigenes Apriori. Wenn etwas von innen bewegt. d.i. belebt, so hat es Apriori. In d. Mathematik bewegt Apriori, math. Gebilde ist nicht zusammengesetzt. (17-360)⁴⁹⁾

大正8年

- 1月1日 情意に於ける真理。Duns Scotus の sapientia, 反理性にあらざり超理性ならざるべからず。支那哲学は情意を本とするか。[上欄] What is "concrete"? (17-361)

- 1月10日 …… Geschichte が行為の Norm となるには allgemeingültig とならねばならぬ。〔上欄〕小なる人間は歴史の中に生れるが大なる人間は歴史を作るものである。Amor fati (17-361~62)
- 1月13日 〔上欄〕 historische Zeit と naturwissenschaftliche Zeit. (17-362) ㊦
- 1月25日 〔上欄〕 Idol を作らざりし猶太人印度人、その良心の深く強きを見る。之を抽象的といふものは深き鋭き内面の要求なきものである。(17-362)
- 2月2日 A is A. positiv + ; A is not Non-A. negativ—. Vertauschbarkeit のない時は Gruppe の Einheit がない。従つて Zahl „Eins“ はまだ成立せぬ。Thesis, Antithesis の代〔り〕に pos. u. neg. の語を用ゆべきか。(17-363)
- 2月6日 …… Wille の Gegenstand は geschichtliche Welt である。故に Wille は Wille 自身を目的とすると考へられる。sittlicher Wille と然らざるものとの区別は、その目的が内にあるか外にあるかによる。即ち Autonomie か Heteronomie か。(17-363)
- 2月15日 〔上欄〕 Psychologisch に Freiheit を Charakter に帰する。併しこれは何等か Ursache あるならんといふに同じ。要は Geist は Natur なるかにあり。Kausalität は何処かは始まらねばならぬ。Weltanfang は各瞬間の Geist と Natur との間にある。(17-363~64)
- 3月14日 〔上欄〕 A is A. d. Hintergrund Einheit. Unmittelbare Verbindung d. Einheiten. (17-364)
- 3月24日 〔上欄〕 Insofern reflektire [-tierte?] Akte irgendwie Inhalte haben, psychologisch. (17-365)
- 4月16日 〔上欄〕 Kulturbedeutung der Philosophie setzt Wertbew. voraus. (17-365)
- 4月25日 〔上欄〕 Hypothese によって Erfahrung に follow する。(17-365)
- 大正12年
- 5月21日 From this very day I die to the world, I live only in my philosophy. Alles geopfert, alles geopfert. tiefes einflussreiches Erlebnis. U. m. F.

これらの記述は、断片的ながら、西田がどのように思索していったかの痕跡をとどめるものである。とくに、最後に引用した日記（大正12年5月21日）には、大いなる決心のほどが示されている。これが書簡になると、さらに詳しく自己の所信を表明している場合も出てくるので、そのような箇所を二、三引用してみよう。

大正2年

10月3日（田部隆次宛）

……学問や芸術は何のかのといった所で人生の真の味は死生の間に出入する至誠一念の生活の外になしと存じ候 つまらぬ子供の雑誌なるが『日本少年』にあつた長野県の小学校の生徒が駒ヶ嶽に登つて凍死した時の記事など読んで深く此感を強め候兄が弟の来らぬ為帰つて弟と相抱いて凍死せるなど何んと憐の話ならずや トルストイのいふ所誠に真理ありと存じ候……

小生は今年は宗教学と心理学を講義せねばならず あまり自分の好まぬものの為多忙にて困り居り候……（18-170）

大正5年

1月11日（桑木或雄宛）

……仰の如く Planck の Neue Bahnen の終りの方は余程 Pragmatism の様にも相見之候 併し小生はやはり物理学にはそれ自身の目的といふものがありそれは人間の Nützlichkeit とは異なるもの様に思はれ候 Planck が Sache der prak. Vernunft と申す所はいかにも Pragmatism に候が併しそれでは Physikalische Erkenntnis 以外のものとなるべく候 phy. Erk. その物の真理か否かを定むるは哲学の範囲のこととなるべくそれが又小生などの考では単に Pragmatism ではなからうと存じ候 併し尚篤と研究可致候……（18-184~85）²⁴¹

大正8年

7月11日（山本良吉宛）

拜啓 善も悪もないといふのは極めて深い宗教思想とは存じ候へども それが即ち自然主義（文芸上の）の立場とはいかがのものにや 今日の文芸上の自然主義とは科学的自然に本づくものにて 十九世紀半の自然科学万能時代の余波と存じ候 此の自然主義はすべて神秘的宗教的といふものに反対いたし候 Zola の如きその代表なら

ん貴兄の御考の如き善悪を超越した立場を自然の合一とも云ひ得るが かかる自然とは科学的自然にあらず 此の如き主義の文芸を神秘主義といふ 今日の象徴主義の文芸の如き此種と存じ候 而してかくの如き文芸は宗教と結びつき得ると存じ候……
(18-211)²²⁾

大正11年

8月15日 (西田外彦宛)

……物理化学といふ如き仕事は今日の学問発達から見て非常に面白い学問であると思ふ 最近の物理学の進歩は化学の領分に及ぶべく 開拓すべき余地は非常に広いと思ふ 唯日本の学者は化学を知るものは物理を知らず物理を知るものは化学を知らず且ついづれも深い数学的理論にまで入込むものはない かかる部分に少しでも手をつけることができれば人生に於ける貴き仕事の一なるべく又すべて学問は深く入れば入る程興味の生ずるものである 哲学や文芸は一寸と面白さうだが少し本気にやりかかれば非常に困難のものにて茫漠として捉へ難く誰も迷はぬものはない すぐいやりなりやめる気になりやすい 要するに此方は非凡の天賦と非常の努力とを要する故に百人に一人 千人に一人も真に成功するものはない 自然科学などと違ひ哲学文学の中途半端は何にもならぬ 文学や哲学は何人も読んで味ふべきものであるが軽々に之を専門とすべきものでない 自分などでも今日まで幾度哲学をやめ様と思つたか知れぬ今でも始から数学をやつて居た方がより面白かつたと思ふて居る位である 文学や哲学を専門にせねば人生に意味がないとか不幸とかいふことはない 人生の目的は人生に対して真摯なる仕事するによつて解せられる ゲーテのファウストでも迷ひに迷ふた最後にさういふ事になつて居る そして人生に於ける真面目なる仕事といへば自然科学の研究といふ如き貴き仕事の一でなければならぬ 文学者や哲学者が何か幸福なものとも思へば誤である (18-249~50)²³⁾

12月17日 ((山内得立宛)

……フラ アンゼリコよりもジョットの方が深いといふのはさうだらうと思はれます 画を見たことのないものがこういふことを云ふのは可笑いですがアンゼリコの方は深いといふより寧ろ唯 heilig といふべきでせう Giotto の様な深く大きなものではないでせう 芸術もごちやごちやした Art よりも深い大きな creative な精神の現はれて居るのがよい ドーリヤの建築といふのは全く想像できぬが私は建築には

どつしりとした落付きといふことが大事だと思ひます…… (18-259)⁴⁴

大正13年

11月18日 (植田寿蔵宛)

昨日はわざわざ御著「芸術哲学」御持参下さいまして難有存じます まだ少しばかり見たまでですがこれだけまでにこなしてかかれたのは中々お骨の折れたことと存じます 私共哲学にて考へてゐることが芸術の具体的事相と結びつけられた様に感じまして大変面白く存じます…… (18-279)

大正15年

6月8日 (R. Mutai 宛)

……けふ「哲学研究」6月号を御送りした 此論文はまだでないが 私はアリストートルが「主語となつて述語とならないもの」と Substanz を定義したものを逆に「述語となつて主語とならないもの」といふことによつて論理的に意識を定義しようといふのです そして主語の超越は特殊の方向に無限に進むと同時に述語の超越は無限に一般の方向にすすみそれが無限に一般となった無にし有を包むもの 絶対に映すもの Materie にして Plotin の das Eine を含むものを見ようといふのです かく述語が無限大の方向に自己を超越して自己を失うた時主語的なものは特殊の極致に達し自己自身を直観するものとなるのです 併し此等の委しきことをまだ此論文にかけませぬでした 併し私は之によつて私の最終の立場に達した様な心持がいたします これより此立場に立つて従来のをすべて reconstruct して見ようと思ひます…… (18-303~4)⁴⁵

これらの言説は、やはり、科学・文学・芸術・哲学諸般に触れつつ、西田の自由な考えを述べているものである。すでに第一から第八にわたって特徴づけをしたときもそうであったごとく、西田の関心は、一括して〈文化〉と称せられてよいものに行き渡っていることが知られる。この時期の西田は、われわれがすでに取り上げて論じた桑木や土田や阿部のように、文化、文化というようには口にしなかつた。しかし、実質的に、西田の思索の営みは、文化成立、文化形式の根底に触れるものであった。大正8年4月16日の日記にも記されていたように、哲学の文化的な意味は価値なるものをどのように捉えるかを前提と

する。そしてそれは、ふたたび、そもそも価値なるものはいかにして成立するか、人間のいかなる意識ないし精神の活動にかかわるものであるか、などの問題へと還元される。そこに、悪戦苦闘の哲学的思索が集中されるのである。

この集中において、特徴は、『善の研究』以来の意識の問題をさらに追究して、これを軸として考えているということである。『善の研究』に続く著書としては大正6年の『自覚に於ける直観と反省』があり、これを無視することはできないが、その思索の続行は、大正期の最中に、この意識の問題をめぐってなされており、やがて大正9年『意識の問題』として刊行される。つづいて、その思索は、大正12年刊行の『芸術と道徳』となって示されるが、その主題が芸術であり道徳であることは注目に値する。すなわち、いわゆる〈文化〉の事柄へと、思索のこの段階で触れているのである。それは、すでに指摘したように、漸く、昭和に入り、西田の思索が〈場所〉の論理にまで深められてゆくにしたがって、ふたたび、顕著に、〈文化〉の名のもとに、取り上げられることになる。西田哲学が、その大正期における自己形成において、大正文化主義、人格主義にただちに應じて自己主張はしなかったけれども、それらとまったく無縁のもの、無関係のものでなかったことは、いまや明らかであろう。

なお附言すれば、すでにそれぞれの箇所では指摘し、あるいは注記したように、西田は、この時期を通じて、たえず、学（科学）の基礎づけ、諸学の領域の区分けと関連性等について思索をつづけているのである。歴史と自然、科学と哲学、科学と文学・哲学、文学と哲学、宗教と科学等々をテーマとして取り上げて、執拗にその異同を追究しているのである。しかし、それと同時に、人生観的な決着を迫る課題とも取り組んでいることを、見落してはならない。「学問や芸術は何のかのといった所で人生の真の味は死生の間に出入する至誠一念の生活の外になしと存じ候」⁹⁸ という言葉がそのことを示している。この言葉は、西田哲学における学的努力と人生観的努力とのかかわりあいを示しているともいえるのである。カントでいえば、理論哲学と実践哲学、認識論と倫理学のか

かわりあいであるともいえる。カントがこの二つのものをいかにして結合すべきかに苦慮したように、大正期の西田哲学の形成もまた、これと同様な問題に直面していたのである。西田は、カントのようにまず二つに分けてしかるのちにこれを結びつけようとするのではなく、はじめから一なるものを追究し、その自己展開の相においてこれら二つのものを見ようとした。そして、文化ということも、その線上においてはじめて問題となるべきものであったのである。

- 注(1) この雑誌は隔月刊行の予定で、株式会社「大正文化」が発行所であり、発売は徳間書店が引き受けている。編集人・発行人は深見喜久男となっている。創刊号は9月号となっているが、発行年月日は昭和52年8月10日である。
- (2) 拙稿「大正期における倫理・宗教思想の展開——方法論をめぐって——」(早稲田商学第239号, 昭和48年12月) 参照。
- (3) 鹿野政直編『大正思想集Ⅱ』(近代日本思想大系34)「解説」420頁参照(筑摩書房, 1977年2月)。
- (4) 拙稿「明治期における西洋哲学の受容と展開(1)——西周・西村茂樹・清沢満之の場合——」(早稲田商学第201号, 昭和43年6月) 参照。
- (5) 船山信一『大正哲学史研究』(法律文化社, 1965. 11) 233頁以下。
- (6) 同 239-240頁。
- (7) 竹内良知編『西田幾多郎集』(近代日本思想大系 11)「解説」452頁参照(筑摩書房, 1974年7月)。
- (8) 上山春平編『西田幾多郎』(日本の名著47)「解説」77頁以下参照(中央公論社, 昭和45年8月)。
- (9) 西田幾多郎「日本的といふことについて」(岩波書店刊『西田幾多郎全集』昭和40年版, 第13巻, 120頁)
- (10) 竹内良知編, 前掲書, 453頁。
- (11) この後、大正10年7月29日に、かの有名な次の和歌が記されている。「赤きもの赤しといはであげつらひ五十あまりの年をひにけり」(この歌は、もと、「甘きもの甘しといはであげつらひ五十余年の生の寂しさ」を改めたものである。たしかに、改められた歌のほうが、すぐれていると思う。)
- (12) このように、西田はベルグソンを高く評価する。とくにオイケンの思想を粗雑とするのは、それが、かなりの程度、人生哲学に傾いているからであろう。おなじころ、おなじベルグソンとオイケンにも影響を受けた帆足理一郎は、ベルグソンの創造的進化をもっと進化論風にとらえ、自己自身の人生観風の哲学思想へ取

- り込んだ。そのため、帆足においては、オイケンに比してベルグソンの天才を深く突っこんでは把握していない。
- (13) ブランクの考えをプラグマティックに捉えるこの箇所は、のちにふたたび取り上げることにする。本論考43頁参照。
- (14) フッサールとリッケルトに対するこの批評は、西田の立場をよくあらわしている。いってみれば、分析に対する総合、閉じた体系に対する開かれた体系を、西田は求めたのである。
- (15) メーヌ・ド・ピランへの共鳴は、その意識の分析や意志の考察などがポイントであろう。
- (16) この宗教学講座の担当は「あまり自分の好まぬもの」であったと、西田は書簡に書いている（のちに引用、本論考43頁参照）。しかし、他方、時を同じくして、しばしば宗教に関する講演を行い、その思索と体験を深めているところからして、西田は「宗教学」という形での講義は好まなかったが、独自の体系的展開の軸をなすものとしての宗教なるものの哲学的思索は、むしろすすんで行ったといつてよからう。これに関連して、同じことが心理学についてもいえるのである。
- (17) これら二、三日の日記の記述をよむと、西田の基本的な考えのいくつかが分つてくると思われる。バルメニデス解釈から数学的対象、集合、物体といった概念への推論は独特なものであり、分析にも直観的な方向づけ、全体なるもの前提が必要であることや、歴史にも全体なるもの前提があつてはじめて具体的な現実として把握されることや、アプリオリとはなにかということなど、西田哲学の息吹がよく感じられる。
- (18) ここで述べられている、精神的なものにかんしては抽象的がかえって具体的であるということ、カントの、一般は形式主義とみなされている定言的命法がじつは具体的であり、その理由は精神が自由である点にありとすることなどは、まさしく西田流の捉え方である。カント解釈としても傾聴に値しよう。
- (19) 想像 (Phantasie) がそれ独自のアプリオリをもっているとされることは、注目に値する。
- (20) 歴史にかんする思索がつづいている（なお、大正8年2月6日の記述も参照）。歴史と自然科学を区別しようとするのである。西田はそのようなテーマで講演もしている。
- (21) 物理的認識とプラグマティズム、それとの哲学の領分という問題もまた、注(20)とあわせ考えると、興味あるものである。
- (22) 自然をめぐる、科学上の自然主義と宗教上の自然主義を峻別しようとしている。上代の歴史と自然、科学と哲学などの区分けと相俟って、西田の考えをそこに見ることができる。

- (23) これは、西田が子息にあてた手紙であり、自己のこれまでの体験を率直に述べている。西田は、子息の心をひるがえそうとして、桑木或雄にそのことを頼んでもいる。これまで指摘したような、西田の基本的態度である歴史と自然、科学と哲学等の区別にみられるように、科学と文学・哲学との領分の違いが強調されるとともに、また、ある意味では、それらの人生における意義という点からすれば、異なるものでないことも、主張されているのである。
- (24) ここには、西田の芸術観が端的に述べられている。heilig として creative という徴表は西田哲学の体系のうちに所を得るものである。なお、次の植田寿蔵宛書簡を参照。
- (25) 主語と述語の関係を、在来の主語的論理の方向を逆転して、述語的論理の方向を強調する立場から説こうとする西田の意図が、ここは明白に示されている。たしかに、この時点ではまだ十分に展開されるにはいたっていないけれども、これ以後、この立場は、くりかえし西田の思索に、基本的な枠組みとなって続くのである。
- (26) 大正2年10月3日、田部隆次宛書簡。本論考43頁参照。